慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	企業研究とその方法
Sub Title	An epistemological study on the theory of the firm
Author	渡部, 直樹(Watanabe, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2015
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.58, No.2 (2015. 6) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	渡部直樹教授退任記念号#最終講義#論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20150600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第58巻第2号
2015年 6 月

2015年6月25日掲載承認

最 終 講 義

企業研究とその方法*

渡 部 直 樹

はじめに

企業の行動が重要な位置を占めるようになった20世紀初頭より現在に至るまで，多様な企業に対する理論的研究が，経営学，経営管理論，組織理論，組織の経済学，企業理論といった名称で数多く行われている。それぞれの理論は，それぞれが採用する方法，アプローチによってその内容は異なるが，まさに百花繚乱の状態にあるといえる。

これら一連の理論の変遷をより深く分析するには，それらの理論自体の検討のみならず，それらの理論に対してより抽象度の高いメタ理論レベルのフレームワークからの検討が是非とも必要となると考える。われわれは，知識とその進化という概念に注目し，その視点からの学説史研究の方向性を展開しようとしているが，本講義では，とくにその方法，もしくはアプローチの認識論的な基礎について述べてみたい。

具体的には，ポパー（Popper, K.），ラカトシュ（Lakatos, I.），ワトキンス（Watkins, J.）といった哲学者が依拠する批判的合理主義という科学哲学，認識論の視点から議論を進める。彼らの立場は，言明の合理的・論理的な分析を基礎とするものであるが，経験的テストが不可能な形而上学に対しても，論理実証主義等の実証主義が掲げるような「形而上学は無意味」という視点は否定する。むしろ形而上学的知識は，科学的知識の進歩に大いに寄与するだけでなく，それ自身も成長するものと考える。批判的合理主義は，知識に対して懐疑主義（scepticism），可謬主義（fallibilism）に依拠し，「経験的言明は帰納主義者のいうような実証は論理的に不可能であり，反証することだけが出来る」という立場をとるが，決して知識の進歩に対して悲観的ではなく，むしろポジティブであり，「真理」についてもその存在を仮定する実在論に立つものである。

当講義でとくに強調したいのは，批判的合理主義の世界観であり，知識に対する独特の視点である。批判的合理主義の創始者であるポパーは，われわれの世界について，以前の身心二元論の

---

* 本日は，清家塾長，金子商学部長をはじめ多くの皆様には，私の最終講義にお出でいただきお礼申し上げます。また当講義を企画・運営していただいた商学部スタッフ，渡部ゼミ・大学院のOBを含めた多くの方々に感謝申し上げます。

世界観に対し，３つの世界観（３元論）を提示する。つまり，現象のレベルを世界１，人間の心理のレベルを世界２，そして客観的知識のレベルを世界３とした。とくに世界３については，その住人は法律や制度，理論といったものであり，まさにそれらは人間の構築物であるが，それ自体が自立性を持ち，独自に進化する実在であるとみなす。

知識の進化は，淘汰メカニズムによって引き起こされるという意味でまさにダーウィン主義的なものであるが，世界１の生物体の進化のように偶然によってのみ行われるというよりも，あくまで人間の熟慮によって引き起こされるという性質のものである。そのため，その進化は，連続的であり，その成長や進歩を想定しているということから，進化の定向性といったものも仮定されるのである。いわゆる生物の進化の範疇からみれば，あたかもラマルク主義的な獲得形質の遺伝といったものをも仮定しているようにも見える。ポパーのダーウィニズムの進化概念の特異性と重要性は，偶然性と自然淘汰の生物の進化に対して，認識における定向性と獲得形質の遺伝の視点を持ち込んだことである。われわれがもっとも注目するのは，まさにこの進化概念による知識成長，とくにその進歩にかかわる認識論なのである。

私の専門は学説史研究であり，それは理論の認識の進化や進歩を議論することを目的とする。この研究目的を実現するには，明確な尺度をもって，個々の学説を連続する諸理論の進化プロセスの中で検討することが必要と考える。その点，知識の進化を，「**問題→解決→誤り排除（テスト）→（新しい）問題**」と考えるポパーや批判的合理主義の観点は，実り多いものであると考える。

１．現代における企業研究とその方法

諸理論を科学哲学のような認識論の視点から議論するという，メタ理論としての学説史研究は，ドイツにおける経営学（経営経済学）研究では，伝統的に行われてきた。わが国でもかつては，その系統を引く研究は盛んに行われており，私の恩師の小島三郎教授の研究は，この頂点に立つものとみなされている。しかし，近年は，アメリカのプラクティカルな経営研究の影響が大きく，そのようなメタ研究が少なくなっていることも事実である。

しかし，現実応用性を重視するアメリカの経営学の系列でも，科学哲学等を用いたメタ研究を行い，企業・経営研究の科学性，論理的妥当性を論じた研究者も決して少ないわけではない。Carnegie School の創始者であるサイモン（Simon, H.A.）は企業・組織研究における論理性を主張して，科学としての経営学構築の努力を行った。彼は，論理実証主義（Logical Positivism）に立ち，論理的な言明の分析を主張し，意思決定・問題解決過程の理論化を試み，その功績から1978年にはノーベル経済学賞を受賞した。

しかし，ポパーらの反帰納論者によって帰納の原理を仮定する論理実証主義が強く批判されたことから，サイモンの方法論・認識論も大きくこの影響を受け，変化した。1940年代の強い帰納主義的色彩の濃い実証主義の視点は修正・後退させられ，問題発見の論理にかかわる心理学的研究（特にコンピュータプログラムを用いた）へとシフトした。そのため，発見過程から得られる

（科学的）理論についても，「当該理論は普遍言明ではない，データから得られるパターンにすぎない」という瑣末な解決にとどまったのである。

サイモンの研究は，それ以降，学習論のマーチ（March, J.），進化経済学のネルソン＝ウィンター（Nelson, R. and Winter, S.），取引費用経済学のウィリアムソン（Williamson, O.E.），ケイパビリティ理論のティース（Teece, D.）等に知的な影響を与え，その後の組織・企業研究に対して大きな貢献を果たしたことは確かである。しかし，経営学の理論に対する認識論的議論については，サイモン以降，あまり大きな進展がないのが現状である。

２．今日の認識論の問題状況と企業研究

経営・企業の諸研究に対するメタ理論的な学説史研究においては，当然ながら，知識をどう捉えるかが，もっとも重要な問題となる。このような観点から，今日の知識をめぐる議論（認識論）を示すとともに，本報告で主張するアプローチを明らかにしたい。

まず，最初に批判的合理主義の観点から，世界，ならびにそこにおける知識について説明を加えたい。ポパーによれば，われわれの世界は３つに分類できるという（表１）。

この中で，世界１は，物理的な力や生物体のレベルの現象，世界２は，心理にかかわる世界，主観的知識，世界３は，科学的問題，理論のほか，芸術作品，社会的制度（法律，市場）といった人間精神の産物が，その住人となるとされる。この３つの世界は，主観の世界である世界２を通じて，お互いに相互作用するため，その意味で開かれた世界であるという。たとえば，理論や制度（世界３）を理解するにも，理論のアノマリーと現実（世界１）とを比較してその妥当性を評価するが，それもわれわれの思考過程・五感（世界２）を通じて出来るのだという。その中でも，とくに世界３は，人間が作り出した客観的世界であり，遺伝子コードによって伝承されない新世界であるという。

学説史研究の対象となる理論は，客観的知識といえるものであり，具体的には世界３に属する。その重要な問題は，現代の認識論，とくに批判的合理主義の視点からは，以下の３つに要約されると考えられる。それは，①知識の発見，つまり，Kant の事実問題といわれる，知識もしくは理論の発見の論理にかかわるもの，②知識の正当化，つまり，Kant の権利問題といわれる，知識の妥当性，理論のテスト（可能性）の問題にかかわるもの，③知識の進歩，つまり，知識，理論の進化と認識進歩にかかわるもの，である。

それら①②③の問題はそれぞれ，以下の問題群に分類される。それらは，①については，具体的にはｉ）知識は，どのように得られるのか，ii）知識の発見（獲得）に論理はあるのか，iii）暗黙的知識は，科学的説明でいかなる役割を担うのか，である。これらのｉ，ii，iiiの問題は，企業・経営研究においては，とくに進化経済学（Nelson & Winter），ダイナミック・ケイパビリティ論（Teece），組織的知識創造論（野中）に直接かかわっているといえる。

ｉ）は，経験とのかかわりで知識がどのように得られるのかについてであるが，一方には，感覚を通じて経験の中身が入り堆積し消化され知識となる（＝精神のバケツ理論）といえる視点が

表１　知識と３つの世界

世界	性格	例（知識）
世界３	人間知性の創作物 客観的知識 自律性　独り歩きする 世界１（実在）との関わり	科学　理論　推論　言語　芸術(音楽作品　絵画等）　法律　市場　神話　哲学　理念　神学　数学　論理学　形而上学
世界２	主観的・心理的世界 主観的知識 五感を通じた個人的経験 自己の五感への信頼 ＝実在性	知識の発見（創発）　理論の創造　痛み　意識的経験　夢 暗黙的・明示的知識（M. Polanyi）
世界１	物理的世界・生物的世界 物理現象の世界 机を蹴ると蹴り返されること ＝実在性の確認	現実世界 物体から構成されている世界の知識 生物体の遺伝情報（DNA ゲノム）

あり，他方，ア・プリオリな知識の存在を仮定し，それを現象に照らしてはじめて観察可能な知識が得られる（＝サーチライト理論）という視点が存在している。この問題に対しては，われわれは論理的には，われわれの持つア・プリオリな知識なしで知識を得ることが出来ず，それを使って経験世界をサーチライトのように照らすことで，はじめて知識を得ることが出来ると考える。

ⅱ）の知識の発見（獲得）の論理性については，果たして帰納的推論が正当化されるのかが，つまり，帰納の原理の確立可能性が問題になる。しかし，ポパーが指摘したようにその論理を構築する作業は，ア・プリオリズムと無限後退を引き起こす。そのため，発見の論理は論理的には存在しないのである。この知識発見の論理にかかわる研究は，一般には観察から理論を発見する方法とされ，経営学をはじめ多くの分野で試みられている。しかし，それらの多くは，論理学と心理学を混同する傾向が見られる。つまり，彼らの問題としているのは知識発見過程の論理性を問うものではなく，主体の中で行われる発見の心理学なのである。たとえば，先に述べたサイモンのこれについての研究は，まさに，個人がデータからいかに主観的にパターンを定式化するのかについての心理学的分析であり，もちろん，それはバケツ理論の応用の典型といえる。

知識が主体の生得の知識を通して得られるのであるならば，次は，ⅲ）暗黙的知識は，いかなる役割を担うのかという，個人が持つ非明示的な知識の役割についての議論が出てくる。これについては，知識の暗黙性は背景知識としては認めるものの，あくまで知識の批判的議論可能性を重要視して，知識の客観性を主張する立場がある。これは批判的合理主義の立場であるが，これに対して，知識の主観性を主張する立場がある。それは，ポスト合理主義といわれる立場で，その代表者のマイケル・ポラーニ（Polanyi, M.）は，知識獲得とは個人が自らを対象に投影する主観的行為であるとし，暗黙的知識（＝ tacit knowing）こそが知識の中心であるという。彼は，知識は基本的に暗黙的であり，個人，もしくは限られた集団内でのみ理解可能であると考え，科学理論のテストの可能性も否定している。つまり，彼は創発を重視するが，知識の成長・進歩は否

定し，暗黙的知識も明示的知識には変換されることはないという。その点からみれば，「暗黙知から形式知への変換による知識創造を説く」野中の SECI モデルは，ポラーニの議論とは矛盾すると考えられる。

次に②「知識はどのように正当化できるのか」に関して述べてみたい。20世紀前半，科学主義的な論理実証主義によって，「科学的（経験的）理論は，経験によって真なるものとして実証可能（verifiable）であるか，少なくとも確率的には決定可能である」という主張がなされた。しかし，これに対して批判的合理主義者等から帰納的推論にかかわる批判がなされ，「知識は実証できないが，反証（falsify）のみ可能であり，そのためすべての知識は，未だ反証されていないという理由で，暫定的な真理性を与えられる」と主張された。しかしこれらに対して，「知識は客観的に正当化できない」というポラーニやクーン（Kuhn, T.）といったポスト合理主義者や相対主義者による主張がある。彼らによれば，知識は，あくまで個人の主観的認識・信念にとどまるものであり，同じ規則・フレームワークを共有するグループによって，そしてそのグループへの信頼においてのみ存立することになる。この議論は，現在，ある程度の支持を得ているが，その実り豊かさについては疑問が残る。

次に，③「知識の（認識）進歩はいかに可能になるか」については，われわれは，ダーウィニズムの視点からの客観的知識（＝世界３の住人）の進化の問題として，ポパーの問題解決プロセスである　$\mathbf{P_1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P_2}$　「問題（P）→暫定的解決（TT）→批判的議論（EE）→新しい問題（P）」から示すことが出来る。つまり，進化は問題から始まり問題に終わるが，あくまで（生物体でいう自然淘汰に相当する）批判的議論を通じてこれが行われるというものである。しかし，知識の進化は，世界３といえる人間の作った構築物において生起するものであるため，長い期間における絶え間ない批判的議論，もしくは熟慮と狡知によるによるものであり，決して生物体において特徴的な偶然性とランダム・ウォークによるものではない。そのため，知識の進化から成長や進歩といった概念を取り扱うことも出来ると考える。これは，進化における定向性と獲得形質遺伝といった，一見したところラマルキズムの要素を含むように見える。

ポパーは，進化というプロセスが，進化する主体の問題認識が色濃く反映していることを主張する。つまり，それらの要素が内的淘汰圧として，進化の状況において何らかの傾向性を形作り，結果的には（スペア・ヘッドのように）進化の方向性に影響を与えることもあると指摘するのである。外的淘汰は環境によって与えられる淘汰圧であり，進化において最終的な選択を行うものであるが，内的淘汰は生物体の内側から与えられる経路依存的な淘汰圧で，好み，目的といったものから生じ，たとえばクジャクの尾のディスプレイのような，自然選択の観点からみて非合理な進化も――オスのクジャクがメスの気を引くための内的淘汰圧として――説明できる。同様に，世界３に属する知識は，科学的知識，芸術作品，社会制度を含めてそれぞれの目的によって，内的淘汰圧が形成されると考えられる。この観点は，私の LSE 哲学科大学院の直接の指導教授であったワトキンスの命名によって，スペアヘッド・モデルと呼ばれるが，たとえば，科学的理論に応用すれば，「テスト可能性の増大＝真理への接近として」が，「科学の目的」とされるならば，それが内的淘汰圧として，新しい理論が提示され外的淘汰としての批判的テストが行われると解

釈できる。厳しい批判的テストの結果，よりテスト可能性の高い理論が，暫定的に選択された（生き残った）場合，知識（認識）の「進歩」があったとみなせるのである。

以上のように知識の進歩を考えると，認識進歩には，開かれた社会，つまり自由な推測と反駁が重要であると考えられる。しかし，ポラーニ等の主観主義的なポスト合理主義の中では，認識進歩はあくまでも，同じフレームワークを共有するグループ（free society）内で相対的にしか認められないものとなる。現代の経営学の研究者の中には，この主観主義的・相対主義的議論に賛成するものは少なくない。しかし，「すべての知識が主観的であり，ある一定のフレームワーク内でしか理解し得ない」とするこの立場では，とくに理論の進歩，知識の成長を考慮するとなると，重大な問題が出現すると考えられる。

3．企業における知識とその成長

ここで，企業における知識の内容を３つの世界の視点から考えてみたい。世界１の現象レベルは，企業における物的対象の領域である。世界２に属する企業における知識は，組織，ならびに組織メンバーの主観的・非明示的知識となる。それは，明示化されていないが個人に埋め込まれている背景知識，共有されている組織のルールやルーティンがその住人となる。それらは，明示化され，批判的討論の対象となった場合は，世界３に属する知識となる。それは表２のように図式化される。

現代の組織理論，とくに進化経済学の観点では，企業における知識は，ルーティン，もしくはケイパビリティという形で保持されると示されている。別言すれば，企業をルーティンの束として捉える。ネルソン＝ウィンターは，ルーティンは，暗黙的知識の特徴を有するものの，コアの組織ケイパビリティを構成するブロックであると規定する。さらに，コア・ケイパビリティとは，高次のルーティンの一種であり，ルーティンを作成するためのルーティンといってよいと主張する。これらのルーティンやケイパビリティが，世界２の主観的世界の住人か，世界３の客観的世界の住人かは，実際のところ一律に明確化できない。多くのルーティン，ならびにケイパビリティは個人・組織の内面に埋め込まれており，明示化できないため，他の組織には移転が困難なもの（世界２）である。しかしながら，ルーティンやケイパビリティの中にも，たとえば，TQCやジャスト・インタイム・システムのように，明示化（マニュアル化）可能であり，他の企業に移転も可能なものもある。

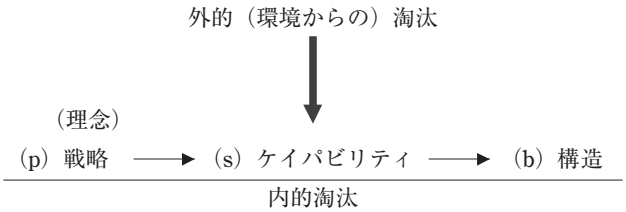
さらに，重要な問題としては，本来暗黙的な知識（世界２）が世界３の知識に変換できるのかというものである。ネルソン＝ウィンターは，暗黙的知識であるルーティンも，模倣・移転可能であるとする。野中も形式知は暗黙知へ，また暗黙知は形式知に変換できるとSECIモデルの中で主張する。しかし，暗黙的知識を言い出したポラーニ自身は，それ自体は，明示化不可能であると断言しているのも事実である。ここでは，暗黙的知識がいかなる意味を持ったものかが問題とされ，議論されるべきである。

先に，知識の進化を内的淘汰圧と外的淘汰圧から成立するスペアヘッド・モデルを示したが，

表 2　企業における知識と 3 つの世界

世界	性格	例（知識）
世界 3	企業における客観的知識 自律性　独り歩きする 容易に移転可能 明示的知識	経営・組織理論，経営理念，戦略，財務諸表，社内諸規則（就業・稟議・職務等），知的財産，ケイパビリティ，組織構造，ビジネス・モデル
世界 2	企業における個人，組織の主観的・心理的世界 埋め込まれたルール 非明示的（暗黙的）知識	ビジネス・モデル（知識）の発見，非明示的な組織ならびに個人の主観的（＝埋め込まれた）ルール，ルーティン，経営理念，個人の意思決定プロセス，ダイナミック・ケイパビリティ
世界 1	物的対象，観察の世界 現実の経済状況，産業状況，企業における諸資源	顧客のニーズ，産業の動向 組織メンバーの関係， マニュアル（冊子），生産システム

図 1



この観点から企業モデルを再構成し，ここにいかなる淘汰圧がかかっているか図 1 で示す。

ここで示されるのは，以下のようである。つまり，ある産業に属する企業は，環境（市場）からの外的淘汰圧を受け，新しい理念・目標を模索・決定するうちに，それを予知させ，定着させることの出来る特定の戦略を持つようになる。企業では，特定の戦略の遂行するにつれ，特定のケイパビリティ（ルーティンを調整するルーティン）の獲得が助長される。そして，これらのケイパビリティに対応した構造が採用されるようになる。特定の構造の採用によって，それと親近性の高い特定のケイパビリティの獲得が促進され，これが当該の戦略をより強固にさせるポジティブ・フィードバックが起き，結果として進化の定向性が強まるというものである。ここからわれわれは，①内的淘汰圧を強く受けるケイパビリティや構造は，強固で変わりにくい。②企業の最終的な淘汰は，外的淘汰によるネガティブ・フィードバックである。③企業の目的や志向にかかわる戦略が，外部からの反駁によって変更されてはじめて，ケイパビリティ，構造が変更される傾向になる，といえるのである。

おわりに

以上，今日の認識論の展開と企業の知識に関する諸問題を述べてきた。最後に，経営・企業研究について簡単に述べてみたい。企業についての研究は，それが経験テスト可能な科学的理論で

あっても，また事例研究を含む歴史研究であっても，また企業の理念や哲学にかかわるものであっても，それらはすべて批判・議論可能な理論であり，世界３という客観的世界の住人である。そのため，それらの知識の成長・進歩をはかるならば，当然ながら，それらをより批判・議論可能な形で定式化することが推奨される。

また，メタ理論（研究）といえる学説史研究は，世界３に属する理論自体を検討の対象とするため，当該の諸研究より高次の観点から厳密に分析することが要求される。学説史研究では用いられる観点自体が精確で首尾一貫していることはもちろん，より普遍的なものであることが重要である。このような学説史研究（メタ研究）の積み重ねこそが，理論自体の認識進歩を可能にさせると考える。

参 考 文 献

Nonaka I. and G. von Krogh (2009), "Tacit Knowledge and Knowledge Conversion: Controversy and Advancement in Organizational Knowledge Creation Theory", *Organization Science*, 20(3), pp.635-652.
Polanyi, M. (1952), "The Stability of Belief", *British Journal for the philosophy of Science*, 3(11), pp.217-232.
Polanyi, M. (1966), *The Tacid Dimension*, Doubleday Broadway Publishing Group.
Popper, K.R. (1972), *Objective Knowledge*, Oxford.
Popper, K.R. (1974), *Unended Quest*, Open Court Publishing Co.
Popper, K.R. (1983), *Realism and the Aim of Science*, Rowman and Littlefield.
Popper, K.R. (1990), *A World of Propensity*, Thoemmes.
Simon, H.A. (1973), "Does Scientific Discovery Have a Logic?", *Philosophy of Science*, 40(4), pp.471-480.
Watkins, J. (1995), "Popper and Darwinism", *Royal Institute of Philosophy Supplement*, 39 September, pp.191-206.
野中郁次郎・竹内弘高（1996）『知識創造企業』東洋経済新報社
渡部直樹（1980）「H. A. サイモン学説の方法論批判」『三田商学研究』23巻１号，pp.23-48
渡部直樹（2000）「２つの進化論と組織行動」『三田商学研究』43巻特別号，pp.31-55
渡部直樹（2008）「生物の進化，制度，並びに科学的知識の進化」『三田商学研究』51巻４号，pp.25-41
渡部直樹（編著）（2010）『ケイパビリティの組織論，戦略論』中央経済社
渡部直樹（2014）「経営哲学と経営哲学研究」『経営哲学』11巻１号，pp.6-16
渡部直樹（編著）（2014）『企業の知識理論』中央経済社